



Data

監督・脚本：ポール・トーマス・アンダーソン

出演：ダニエル・デイ＝ルイス／ヴィッキー・クリープス／レスリー・マンヴィル／ジーナ・マッキー／ハリエット・サムソン／ハリス／レイザ・リヒター／ブライアン・グリーソン

👁️👁️ みどころ

本作は第90回アカデミー賞の衣装デザイン賞を受賞したが、このタイトルは一体ナニ？また、なぜこんな田舎娘をモデルに？それは完璧主義者のデザイナーが、「完璧な身体」だけを愛していたからだ。しかし、そんな男に女が開けた「禁断な愛の扉」とは？そして、「サスペンフルな究極の心理戦」とは？

『氷の微笑』（92年）は脚の組みかえが今なお語り草になっているシャロン・ストーン「女の魔性」がポイントだったが、本作では朝食ごとに提供される毒キノコのエキセントリックさがポイント。なぜ、男はそれを知りつつ食べ続けたの？

そんな男と女の「ファントム・スレッド」＝「見えない糸」がもつれ、絡み合い、唯一無二のかたちを紡ぎ出す姿を、名優ダニエル・デイ＝ルイスの名演技からじっくり味わいたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■このタイトルはナニ？そこに秘められた思いとは？■□■

本作は第90回アカデミー賞の作品賞、監督賞、主演男優賞、助演女優賞等6部門にミネートされ、衣装デザイン賞を受賞した映画だが、そもそも「ファントム・スレッド」とは一体ナニ？第71回カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドール賞を受賞した是枝裕和監督の『万引き家族』は、何と言ってもそのタイトルのインパクトが強いから、一度聞いたら忘れられない。しかし、「ファントム・スレッド」では意味がわからないこともあって、何度聞いても覚えられないから損。「ファントム・スレッド」とは一体ナニ？

パンフレットによると、「Phantom Thread（幻の糸）」とは、ヴィクトリア

時代、王侯貴族の服を作るために長時間労働を強いられていた東ロンドンのお針子たちが、過労のあまり、仕事が終わっても『見えない糸』を縫い続けていたことを指す」とのこと。また、「このタイトルには見えない力という意味も込められており、人知を超えた力に対して人間がいかに非力であるかを表している」とのことだが、それを読んでもイマイチよくわからない。しかし、本作を観ていると、主人公が作るドレスの中にはその1着1着に「見えない糸」で様々な文字が縫い込まれていることがわかる。それはもちろん、自分が作るドレスへの思いだが、同時にそれを着る女性への思いも含まれているらしい。しかして、本作が見せる、ドレスの下に秘めた「ファントム・スレッド」に込められた男女の思いとは・・・？

■□■あの名優の役柄はデザイナー！なぜそんな役を？■□■

ダニエル・デイ＝ルイスが演じた、『ギャング・オブ・ニューヨーク』(01年)、『シネマ2』49頁)のギャング役、『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』(07年)、『シネマ19』300頁)の石油王役、『リンカーン』(12年)、『シネマ30』20頁)のリンカーン役は特筆ものだった。また、現実には『マイ・レフトフット』(89年)、『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』、『リンカーン』の3作でアカデミー賞主演男優賞を受賞し、『父の祈りを』(93年)、『ギャング・オブ・ニューヨーク』、本作の3作で同賞にノミネートされているから、ダニエル・デイ＝ルイスはまさにハリウッドを代表する名優だ。

そんな名優が本作で演じるのは、1950年代のロンドン郊外にある自宅兼仕事場「ハウス・オブ・ウッドコック」のオーナーで、ベルギーの王女・モナ(ルイザ・リヒター)をはじめとする有名な顧客を持つデザイナーのレイノルズ・ウッドコック。あの名優が本作でなぜこんな役を？

私はファッションの世界もデザイナーの世界もよく知らないし、あまり興味もない。そのため、近時公開された、フランスを代表するデザイナーで「モードの帝王」と呼ばれたイヴ・サンローランを主人公とした『イヴ・サンローラン』(14年)も観ていない。したがって、本作でダニエル・デイ＝ルイスが演じる、レイノルズ・ウッドコックによるドレス作りにもあまり興味がなかったが、なるほど、完璧主義者の男が見せる仕事へのこだわりとはこういうことか、ということが本作を見ているとよくわかる。俳優としても完璧主義者のダニエル・デイ＝ルイスは、本作の役作りのため1年間ニューヨークの裁縫師のもとでドレスづくりを勉強し、実際に作れるまでになったというからすごい。

■□■本作のテーマは？お城の主は完璧主義者！■□■

本作のチラシや新聞紙評には「二人がたどり着くのは悦びか？それとも憎しみかー？」「サスペンフルな究極の心理戦！」「愛の糸がもつれ、絡み合い、唯一無二のかたちを紡ぎ出す。」「完璧な身体だけを愛する男に、女が開けた禁断な愛の扉とは一。」等の刺激的な

見出しが躍っている。さらに驚くべきは、「完璧な身体しか愛せない仕立て屋に、女は愛ゆえに毒を盛る」というもの。そこには、「ラスト30分の展開に92%が驚愕!!」がセットにされているものの、ここまでネタバレさせてもいいの・・・？本作のテーマは一体ナニ？

レイノルズはデザイナーとして、仕事上は完璧主義者。そして、私生活においては独身主義者で、彼が心を許している女性はレイノルズのパートナーとして経営責任を担っている姉のシリル（レスリー・マンヴィル）だけだ。そして、仕事場と自宅を兼ねている郊外にある「ハウス・オブ・ウッドコック」は、彼の「お城」として100%彼の管理下に置かれていた。パリではメゾンが会社組織として運営され、オートクチュールからプレタポルテまで包括的に展開していたのと対照的に、ロンドンでは「ハウス・オブ・ウッドコック」のような家族経営スタイルが多かったらしい。ちなみに、そこはレイノルズとシリルの日常生活の場だが、昼間は多くの従業員たちの仕事場のみならず、ファッションショーの舞台としても使われているが、見ていて大変だと思うのは、階段の昇り降り。エレベーターが一般に普及していない時代では、当然（中央の？）らせん階段が「ハウス・オブ・ウッドコック」のような中層建物（？）のメインになり、本作では何度もその昇降風景が描かれるが、毎日の階段の上り下りは大変だ。

それはともかく、そんなレイノルズのお城の中では、冒頭の朝食のシーンでレイノルズ・ウッドコックの恋人（らしき女）が文句をタレていると、彼が「口論する暇などない！」と一蹴するシーンが登場する。多分、この恋人はこれでハウス・オブ・ウッドコックから追い出されたのだろう。ことほど左様に、レイノルズは完璧主義者だが・・・。

■□■本作のヒロインは？そのミステリアス性に注目！■□■

そんな完璧主義者で、完璧な身体だけを愛する男レイノルズに対して「満足する身体」を提供する女は一体ダレ？それが本作最大の注目点だが、それは意外にもレストランで働いていたウエイトレスのアルマ（ヴィッキー・クリープス）になる。アルマはいかにも素朴そうな田舎娘で、絶世の美女というわけではない。また、自認するように胸はあまりないようだ。しかし、彼女はレイノルズが注文するややこしい朝食のメニューをしっかりと暗記し復唱できたから、この女ならひょっとして・・・？

レイノルズがそう思ったかどうかは知らないし、レイノルズがなぜ一目で、もしくは朝食についてのちょっとした会話でアルマに惹かれたのかはわからないが、とにかくこの出会いだけで、その日の夕食を共にしたばかりか、アルマはレイノルズの自宅兼仕事場に入り、ドレスの採寸をしてもらったまでの仲だ。もちろん、私のスケベおやじの興味はそんなレイノルズの仕事ぶりとは別のことにあったが、それがどうなったかは知る由もない。また、姉のシリルもその方面には無関心を貫いているようだ。しかし、その後直ちにレイノルズの隣の部屋にアルマの個室が用意され、朝食から日常的な仕事のすべてについて一緒

にやるようになったから、この男女の進展ぶりにビックリ！

本作でアルマを演じたヴィッキー・クリープスは『マルクス・エンゲルス』(18年)で、貴族出身ながら献身的にマルクスに尽くす妻イエニー役を演じていた女優だと知ってビックリ！そこではいかにも地味な役が似合っていたが、本作では『氷の微笑』(92年)でシャロン・ストーンが演じた「魔性の女」とまではいかなくても、それに近い「愛するゆえに毒を盛る」女アルマ役をミステリアスに演じているので、それに注目！

■□■モデルとしては完璧！しかし私生活は？■□■

『マルクス・エンゲルス』では、貴族の娘ながら貧しき革命の闘士マルクスの妻となったイエニーが、生涯マルクスのために尽くす姿が印象的だった。しかし、それと同じ女優でも、本作でのアルマはモデルとしては完璧だが、私生活ではどちらかというと洗練されていない田舎娘……。『マイ・フェア・レディ』(64年)ではなままた英語の発音を矯正するため、住み込みでヒギンズ教授の厳しい訓練を受けることになったオードリー・ヘップバーン扮する花売りの田舎娘イライザが、ヒギンズ教授への憎しみを込めて「今に見てろ(Just You Wait)」を歌い、逆にやっと「アイ」ではなく「エイ」の発音ができた時に「スペインの雨(The Rain in Spain)」を歌うシーンが印象的だった。それと同じように、本作では朝食時をはじめとして静かな生活を好むレイノルズに対して、何かと物音を立てる田舎娘アルマの“がさつき”が目についてしまう。はじめて出会い、はじめて食事をし、はじめてドレスを着せた時は、“あばたもえくぼ”だったが、ここまでアルマの“がさつき”が目立ってくると、レイノルズのイライラが日々つづいてくることに。

ところが、アルマはそんなレイノルズの批判的な目にもビクともしない強さを備えていたからビックリ！さらに、厚かましいことに、レイノルズのお城の中に入り込んだアルマは、それまでのシ ril の実権を奪うかのように、レイノルズの私生活の領域への侵入も開始。ある日、レイノルズに対するサプライズを計画したアルマは、シ ril の反対を押し切って強行したが、遂にそれはレイノルズの怒りを呼ぶことに。ちなみに、何事にも完璧主義者(=わがまま)のレイノルズは食事にもこだわりが強く、バターが大嫌い。それなのに、アルマがそれを知りつつ、あえてバターを使った料理を出したのは一体なぜ……？

酔っ払いの太っちょおばさんがまったく似合いもしないレイノルズのお手製のドレスを着て酔いつぶれている姿に怒り狂ったレイノルズが、このおばさんからドレスを剥ぎ取る時には、あれほどレイノルズとアルマのチームプレイがうまく機能していたのに、レイノルズのお城での、この食事風景は一体ナニ……？

こうなれば2人はケンカ別れとなり、アルマはお城から追い出されるのは必至。そう思ったが、ストーリーは意外にも……？そして、その後はいつも食事に出されるキノコの種類と味が少し変わったように思えたが、あえてレイノルズがそれを無視して食べ続けていると……？

■□■なぜ結婚を？幸せはどこに？それでも・・・■□■

『氷の微笑』ではラストに見るマイケル・ダグラス演じる弁護士と、シャロン・ストーン演じる魔性の女との肉弾相討つ死闘が強烈だった。それに対して、アルマがレイノルズの食事に提供する毒キノコが大きなインパクトを持つ本作では、アルマとレイノルズの「ファントム・スレッド」＝「見えない糸」のような男女の想いと、ネチネチした絡み(?)が静かな注目点になる。

アカデミー賞衣装デザイン賞を受賞した本作でレイノルズがアルマのために作るドレスはもちろん素敵だが、デザイナーであるレイノルズ自身のファッションも完璧。このように仕事でも私生活でもファッションでも完璧な男レイノルズが、モデルとしては完璧でも女としてはイマイチだらないアルマの欠点を十分知りつつ、本作後半にあえて結婚を申し込んだのは一体なぜ？もちろん、シрилはそれに反対だが、大人の関係、仕事上のパートナーと割り切っているシрилはあえてそれを口にしなかった。しかし、レイノルズ自身が結婚式を挙げた直後に、アルマとの結婚は失敗だった、と気づくことに。本作では、年越しのカウントダウンのパーティの席でそんなシークエンスが登場するので、それに注目！

他方、レイノルズの身体は日々の毒キノコのため少しずつ、しかし確実に弱っていたが、そんなレイノルズに対してアルマは愛情を込めて(?)「あなたには無力で倒れてほしい」の言葉をかけていたから、こりゃ強烈！さらに、レイノルズもそれを静かに額面どおり受け止めていくから、この年齢離れたデザイナーとモデル夫婦は一体どうなっているの・・・？それが、本作のラストからクライマックスにかけての注目点となる。さてあなたは、本作のそんなラストとクライマックスをどう受け止める・・・？

2018(平成30)年6月1日記